

2006夏・日本軍の作った軍事施設跡を訪ねる 濟州島フィールドワーク

飛田雄一

今夏、濟州島を訪ねた。「2006 朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える日韓交流ネットワーク in 濟州島」という会合で、8月4~6日の3日間開催され、日本から45名が参加した。主催は、在日朝鮮人運動史研究会(関東部会代表・樋口雄一、関西部会代表・飛田雄一)および朝鮮近代史研究会(代表・水野直樹)、韓国側では、濟州大学耽羅文化研究所、濟州島史研究会が共催し、濟州4・3研究所および漢拏日報が後援した。



松岳山の特攻基地跡前で

1970年代より強制連行についての様々なグループの調査が各地で行われ、90年代には全国の市民グループが「朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流集会」を1999年まで10回にわたって以下のように開催された。

(1)1990年、愛知県(名古屋市)(2)1991年、兵庫県(西宮市、神戸市)(3)92年、広島県(呉市)(4)93年、奈良県(信貴山王蔵院)(5)94年、長野県(長野市松代町)(6)95年、大阪府(高槻市)(7)96年、岐阜県(岐阜市)(8)97年、島根県(松江市)(9)98年、(金沢市)(10)99年、九州(熊本市)

その後、全国交流集会は形をかえて各地の市民グループが、呼びかける形で(1)2000年9月、兵庫県(神戸市)(2)2001年9月、大阪府(茨木市)(3)2002年、秋田県(花岡)(4)2004年10月、北海道で開催され

た。

今年は、初めて韓国濟州島でこの交流集会が開催されることになったのである。濟州島には沖縄戦を上回る日本軍が投入され、数多くの朝鮮人が動員され「本土決戦」のために総延長50キロにおよぶ地下軍事施設を初め多くの軍事施設が作られた。現在もそれらの施設の一部が残されているのである。飛行場関連の施設は「本土」よりはるかに完全な形で残されているのである。今回の交流集会には日本から45名が参加した。

交流集会の公式日程は3日間だが、その前後にオプションがついていた。そのは、前日の「4・3人民蜂起(1948年)」、そのは集会翌日の漢拏山登山である。私はもちろんフルコースで参加した。

現地集合、現地解散の交流集会は、オプションも現地集合。集合時間は8月3日(木)午後1時30分、場所は濟州空港である。関空便、成田便、ソウル便、釜山便あるいは船便で20名が集合した。そしてチャーターした観光バスでのフィールドワークが始まった。ガイドは濟州4・3研究所の若い研究員・高誠晩さんだ。このバスは44人乗り、メインの日本軍施設フィールドワークでは満員になるが、オプションでは余裕である。

最初の訪問地は、濟州4・3平和公園である。広い敷地の中に記念館、慰霊塔、追悼の広場などがある。公園の場所は事件と直接関係がないようだが、地価の安いところに広い敷地を確保するために選ばれたという話も聞いた。いずれにしても、韓国の政権が変わり「逆賊」とされていた人々が名誉回復されてこのような立派な公園が作られたことに感動した。



済州4・3平和公園・記念館



内部に犠牲者の名前が集落ごとに刻まれている。

次に訪ねたのが楽善洞。4・3事件当時、パルチザンを孤立させるために写真のような石垣で囲んだ地域をつくりその中にいる人々だけがパルチザンでないとしたのである。たまたまこの地域ではミカン栽培の風除けとして今も利用されているためにこの石垣が残っているのである。



楽善洞の石垣

この楽善洞にはまた、殺戮をのがれるために入った洞窟「モクシムル穴」が残されている。これまで日本各地の地下工場跡などに沢山入ったがこの洞窟がいちばんすごかった。狭いし暗い(これは当たり前)し、内部がでこぼこで奥に進むほど引き返せなくなるのではと考えるような洞窟だ。狭い入口をみて躊躇したが、蚊の大群にも責められてもいたので、えいと思って中に入ったのであ

る。50人ほどが息を潜めて生活していたところで、子どものものとみられる生活用品も人骨も残されていた。



穴の内部に残されている遺物

全長80メートルほどの洞窟で、トンネル調査のプロの塚崎昌之さんももうひとつの出口までいくのを断念して引き返してきたほどである。



再びバスに乗り、虐殺現場のひとつ北村邑のノブンスイに向った。ここでは村民の3分の1の500名が犠牲となったところである。作家の金石範さんがここを訪れたとき、墓標もなにもないので、せめて石でもと畑の一角に積み上げたものが残されている。多くの子どもの犠牲になっており、絵本がおかれている石組みもあった。



子どもための絵本がおかれた石組み

次の目的地「消された村」に向う途中に参加者のひとり金慶海さんの実家に立ち寄ることにした。金慶海さんは兵庫朝鮮関係研究会のメンバーで、424阪神教育闘争の研究等で知られている。今は住む人もなく、はっきり言ってぼろぼろの家だったが、藁屋根の昔の面影を残した家だった。



実家の前での金慶海さん

「消された村」は坤乙洞。1948年1月4日午前9時ごろ、軍の作戦により24名の村民すべてが殺されて村が消滅してしまったのである。いまは、その集落の石組みだけが残っているのである。



2003年4月3日建立の記念碑



坤乙洞「消された村」の石垣

夕食は、豚の焼肉、濟州島の名物だ。日本でも最近よく食べられるようになったサムギョブサルだが、濟州島ではオギョブサルというらしい。3枚肉に対して5枚肉ということか。私の好みは安物の冷凍豚肉をそのまま薄く切ってアルミをひいた鉄板で油を落としながら焼くサムギョクサルだ。以前、釜山で3人なので3人前を注文したら横に座った女学生が2人で4人前を注文しびっくりした。安い店では量も少なくそのように注文するのである。ベーコンをカリカリに焼いて

食べる感じで美味である。この夜食べた濟州島の豚ももちろん上等で美味であった。

宿泊は、オリエンタルホテル横のテギョン(太京)モーター。京都創生大学の辛在卿先生のオモニの経営するモーターだ。韓国のモーターは日本のそれとは少し違っている。誤解?のないように。辛さんとオモニにはお世話になりました。感謝。



翌8月4日(金)、午後に本隊と濟州空港で合流するのだが、それまでオプションの4・3ツアーが続く。訪ねたのは別刀峯の海軍地下壕跡。チャンス(長寿)散策路沿いにいくつかの穴が空いている。散策路沿いのは中に入れないように柵がしてあるので、少し藪を分け入って中に入ってみた。未完成の地下壕で10Mぐらいで行き止まりだった。



別刀峰の地下壕跡

午前中さらに空港近くの「英墓園」に立ち寄る。ここは前日に訪問した政府の作った43記念施設ではなくて地域の住民が自ら作った施設であるのが特徴である。ここには3つの霊が祭られている。植民地支配時代の独立運動、朝鮮戦争、43事件の犠牲者である。解説の高誠晩さんによると相互に矛盾をはらんだ歴史を踏まえながら住民たちが作ったことに意義があるとのことだ。私もそう思った。敷地内には大阪の下貴一里親睦会の記念植樹もあった。



独立運動、朝鮮戦争、43事件の犠牲者を祭る

英墓園でオブション「4・3」を終了して、空港にみなを出迎えに行く。また、関西、関東などから続々と集まってきた。総勢44名。簡単な結団式?の



のちバスに乗り込む。バスは、ガイド席を含めて45名。私たちは43研究所の高さんを含めて45名。満員である。ツアコンの私には好都合である。席が埋まっていればいいのであって、人数を数える必要がないのである。

ところで韓国のバスには補助席がない。その理由の有力なのが?アジュマダンス説。バス旅行をするアジュマたちは高速道路であろうと歌って踊って旅をする。助手席があると踊れないので韓国のバスには補助席がないと考える説である。私もこの説を支持している。

公式行事としてのフィールドワークの最初の目的地は、日本軍地下陣地を博物館にした施設=平和博物館。博物館には展示館と地下陣地跡部分がある。第1地区だけが公開されているが、今回は李英根館長の特別の計らいで未公開部分も見学することができた。公開部分は補強され照明も完備していたのでスイスイだったが、未公開部分は狭いうえに滑りやすく高低もある。はぐれると危険なので絶対前の人を付いていくようにとの指示だったが、迷う人もでて、館長さんと呼ぶ声も聞こえたりした。



平和博物館案内図



李館長(右)と通訳をしてくださった神戸山手大学の高村竜平さん

夕方さらに島の南西部分に日本軍が作ったアルトル飛行場跡を訪ねた。翌日、もう一度訪ねる予定なので、航空管制塔?跡から全体を見渡すことにした。景色はいいが上部には柵もない。ここで塚崎さんから説明を聞いたが落ちそうで怖かった。周りには滑走路跡、あるいは掩体壕7、8個を見ることができる。この飛行場から1937年南京大虐殺の年に南京爆撃が行われた。第1号機は無理をして長崎大村から出発したが、飛行距離の限界で帰路は済州島へ。その後の南京爆撃はもっぱらこのアルトル飛行場からなされたのである。



航空管制塔?の跡

この日の宿舎は島の南側にある西帰浦済州大学校セミナーハウス。セミナーハウスの内外で夜遅くまで交流会が開かれたことは言うまでもない。

8月5日(土)は午前中に同セミナーハウスで「濟州島の日本軍軍事施設と強制動員」をテーマとするセミナーが開かれた。

朴贊殖さん(濟州大学史学科)の司会で始められたセミナーは、許南椿さん(濟州大学校耽羅文化研究所長)の挨拶ののち以下の報告/証言があった。

飛田雄一「日本における強制連行・強制労働調査の現在」/黄碩奎(濟州大耽羅文化研究所)「濟州島日本軍大11師団駐屯の実情-現場調査を中心に」/塚崎昌之(15年戦争史研究会)「濟州島での本土決戦準備と戦後をつなぐもの」/池映任(濟州大耽羅文化研究所、代読)/証言・許贊富(第58軍司令部御乗生岳徴兵者)/斉藤正樹(ウトロを守る会)「ウトロのまちづくりに向けて」/内海隆男(広島の朝鮮人強制連行を調査する会、正木峯夫代読)「強制連行・強制労働現場を追って-新聞記事調査について」



セミナー風景



証言する許贊富さん

午後はふたたび満員のバスでフィールドワークに出発。昨日、管制塔跡から眺めた掩体壕にも入ってみた。附近にあった43事件の虐殺現場は「百祖一孫の墓」、虐殺されて百人の祖先に一名孫しかの残らなかったと言われているが、その場所は日本軍が弾薬庫

として掘った大きな穴だったのである。



今の残る掩体壕跡

その横の山はソダオルム。山上には高射砲台が2機残っていた。



高射砲台の跡

更に牧場の柵を乗り越えて山を降りると海軍地下壕跡。入口は牛舎の奥にあった。蝙蝠の飛び交う中、有志は奥まで入っていった。もちろん私も。

海岸まで歩くとそこは松岳山。人間魚雷回天のための特攻基地が日本軍によって作られたのである。そこで働かされた任チャンスさんのお話を聞く。過酷な労働だったようである。



証言する任チャンスさん

海岸沿いに穴がいくつもあいている。いずれも未完成のものだ。その中のひとつがなんと「チャングムの誓い」の最終回に朝鮮で初めてチャングムによって帝王切開手術が行われた洞窟なのである。看板にはどの洞窟か書かれていなかったがチャングムファンの私にはどの洞窟かすぐに分かった。



海岸沿いの松岳山の洞窟



交流会、乾杯は済州大学の趙誠倫先生



記念撮影をする飛田(左)と福田さん
テジャングムで終わりと思いきや、再び山に登ってもうひとつの地下壕に向った。これまた牧場の中を登るといくつか塹壕の跡があり、更に登ると小さな穴があいている。いずれも軍の地下壕跡だ。米軍が上陸した時には塹壕と地下壕を利用して戦うというのである。この地下壕は連絡通路らしく本当に狭い。私は珍しく断念した。その中のひとつは、奥まで進むと頭を岸壁の真ん中からのぞかすことができるというが、今回、誰もそこに到達することができなかった。いずれにしても馬には迷惑なことだったろう。



塹壕跡と人間と馬

充実したこの日のフィールドワークはここで終了し、西帰浦にもどって夕食交流会となった。

公式行事2日目も日本軍施設フィールドワーク。その前に唯一の観光コース、正房瀑布を訪問した。しかしここも43事件の現場でもあった。天気もよく虹も見られたが、写真では無理か？



虹のかかる正房瀑布(見えない!?)

瀑布を満喫したのちバスで御乗生岳登山口へ。ここは漢拏山への登山口でもあるのだが、御乗生岳山頂には日本軍のトーチカが残されている。整備された登山道を歩くこと30分。展望のいい山頂に着いた。



快調に歩く中川さん、仲村さん、鹿嶋さん



御乗生岳トーチカから外を見る

再び御乗生岳登山口に戻るが、更に山を下ってもうひとつの沢を登り返すと別の地下壕があるという。行ってみることにした。メンバーはだいぶ減って15.6名か。かなり急な坂を登ること30分。第1地下壕に到着。ここの蝙蝠(こうもり)はすごかった。だんだんとなれてきて顔に当たっても驚かなくなってくる。更に登ってもうひとつの地下壕にも入ろうとしたが、つい最近の?崖崩れで入口がふさがっている。中からは涼しい風が吹いてきていえるが、トンネルの名手・塚崎さんの「お手上げ」をみて皆、納得の退散となった。



地下壕入口が崩れていて塚崎さんもお手上げ

山を降り、昼食は済州市内でかなり美味しい参鶏湯をいただいたのち、済州空港に向う。2泊3日の公式プログラムの終了である。空港で解団式をして、それぞれの飛行機に乗るメンバーを送った。

明日の漢拏山登山オプションのために残ったメンバー20名は、再び太京モーターに行き、シャワーを浴びてから街に繰り出した。明日の登山に備えて馬料理のフルコースである。済州島の名物料理のひとつだそう。刺身から始まって、ぎょうざ、寿司、煮付け、シャブシャブ、すべて馬である。美味だった。寿司はもうひとつだが、シャブシャブはグー。

8月7日(月) オプションそのの漢拏山登山である。バスはそのまま44人乗りのバスをチャーターしている。朝8時、モーターを出発する。途中でキムパップを仕入れて霊室の登山口までドライブだ。天気は快晴、申し分ない。当初、飛田がガイドの予定だったが、済州登山会の会長で日本軍施設調査にも功労のある呉ムンピルさんが弟子とともにガイドしてくれた。一般的に券売所までしかバスは入れない。(韓国の山はほとんど入場料がいる)が、呉さんが、自動車を手配してくれたので舗装道路はルンルの自動車。そして標高1280メートルから歩き始める。時々呉さんの山のお話は本当に興味深かった。



案内看板

上の地図の左下のコースである。登山コース4つあるが、一番時間の短い簡単なコースが霊室コースだ。だが、このコースと下った御乗生コースは山頂までいけないコースなのだ。2コースは最後の道が急峻で自然保護の観点からその部分を登山禁止にしている。私は、1984年に学生センター朝鮮語講座有志で漢拏山に登ったが(『むくげ通信』84号参照)その後2000年に学生センター43ツアーのときにも漢拏山に登ったがその時は工事中ということで1700M高地までしか登れなかった(通信180号参照)。2年おきに禁止になり、今は全面禁止となっている。頂上にある火山湖白鹿潭(ペンノクタン)は本当に綺麗な湖だが、残念である。どうしても頂上まで登りたい場合には、長時間の登りを

覚悟して東または北からのコースを登らなければならぬのである。

今回のわれわれは、楽勝のコース。綺麗な花をめでながら、ゆっくりと登った。有名な自然の造形・五百羅漢も見事だった。山頂では、呉さんの「顔」で避難小屋で昼食をとらせていただき、山では販売していないビールまでご馳走になった。恐縮。



漢拏山 1700m高地で

今回の最高峰も 1700 メートル高地。記念写真の後にある山の上白鹿潭がある。最後の道が急峻なのである。84年に登ったときは小学生も登っていたが、鎖とロープをたよりにしつつ、石の落ちてきそうな崖を登るのである。道が狭くそこはラッシュアワーでもあった。

下りもルンルンで快適は登山道を御乗生登山口まで降りた。そして回ってもらったバスにのって一路空港に向うことになった。

時間もあったので「お化け(トッケビ)道路」に立ち寄った。目の錯覚によりどうみても下りに見える道路が実は上りなのである。ボールや水を使って確認すると、感覚とは別のことが起こるのである。

このトッケビの仕業か、ここでハプニングが起きたのである。空港に向かう途中でその晩に日出峰で止まるメンバーを下ろすためにバスターミナルで停車した。そのとき、メンバーがひとり足りないことに気付いたのである。トッケビ道路で S さんを忘れてきたのである。45 人満員のときはそんなことがなかったが、20 人のときは危ないのである。ツアコン失格である。S さんは朝鮮語もできるのでなんとかなるだろうという予想どおり、後に無事ホテルで合流できた。なんでもタクシーもなく頼み込んで日本人ツアーのバスに乗せてもらったそうだが、その

ガイドは「なんとひどい旅行会社だ」と憤慨していたとか。まあ、無事でなによりだった。

空港で再びお別れをして、更に残った者が太京モーターにもどった。実は、オプションの登山をすると当日の帰国は無理だろうと私はもう一日泊まる予定を立てていたのである。結局、登山の日もバスをチャーターできることになり、その必要がなくなったのだが、せっかくのもう一日、のんびりと過ごすことにした。

8月8日(火)、7名でまず大きい自然洞窟・万丈窟へタクシーで向う。とても寒い万丈窟であった。その2台のタクシーを結局一日チャーターすることにして、今年できたばかりの海女記念館に向った。



海女抗日闘争記念塔

展示も素晴らしいもので特別に学芸員が案内もしてくださった。敷地内には、日帝時代に抵抗運動をした海女を記念する立派な塔も建っていた。そこで記念写真!

さらにタクシーで日出峰まで行った。運転手の勧める食堂の海鮮鍋がうまかった。今回の済州島旅行の中で随一だった。

この日出峰にもあるという海からしか見ることができない日本軍の洞窟を視察するために?、モーターボートに乗ったりもした充実したオプションを終えて済州島をあとにしたのである。(完)